研究課題　中近世古文書の多面的分析にもとづく料紙の歴史的変遷の研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　天野真志（国立歴史民俗博物館）

　所内共同研究者　山田太造・尾上陽介・高島晶彦・渋谷綾子・小瀬玄士

　所外共同研究者　小倉慈司（国立歴史民俗博物館）・富田正弘（富山大学）・野村朋弘（京都芸術大学）・柳原敏昭（東北大学）・高橋修（茨城大学）・名和知彦（陽明文庫）・貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫）・大山恒（茂木町教育委員会図書文化係）

研究の概要

（１）課題の概要

　古文書研究の進展を目指す上で、文字情報だけでなく料紙繊維や添加物等の物質的情報、さらには抄紙過程に付与された痕跡の確認など、古文書を多面的に分析する方法論の確立が求められる。本研究では、これらの課題を検討するために、考古学的分析手法や植物学などの成果を踏まえた古文書料紙の歴史的変遷を検討する。  
　本研究では、光学顕微鏡やデジタルマイクロスコープを用いて料紙を非破壊的に調査し、繊維および添加物の状態を分析する。特に、古文書料紙の構成物の種類・量・密度などの質的な解析によって製造手法や地域的・時期的特性を見出し、料紙の生産および使用実態を双方向的に検討することで、歴史的・社会的変遷の復元をおこなう。具体的には、史料編纂所所蔵「島津家文書」、陽明文庫、松尾大社所蔵文書、仁和寺所蔵文書、ふみの森もてぎ所蔵「茂木文書」、東北大学保管「結城白河家文書」を調査し、料紙に含まれる繊維や添加物などの構成物解析をおこなう。また、抄紙過程で付与される糸目や簀目、皺などの表面情報を調査し、古文書料紙を構成する多様な基礎情報を蓄積することで、中世から戦国期における公家・武家文書の地域的特質や歴史的変遷について科学的検証に基づく検討をおこなう。

（２）研究の成果

　新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初予定していた調査・研究活動が大幅に制限されたが、これまでに確立した分析手法に基づき、松尾大社所蔵史料、ふみの森所蔵「茂木文書」の調査・研究を実施した。松尾大社所蔵史料は、これまでの調査蓄積を踏まえつつ料紙の顕微鏡撮影を行い、填料の含有量に関する時代的変遷を分析するための基礎情報を充実させることができた。さらに、明治太政官制下における発給文書の顕微鏡撮影を行い、当該期における文書名称と料紙の性格との相関関係を検討した。「茂木文書」については、焼損箇所に注目して料紙および填料の変化を検討するための顕微鏡撮影を実施し、同文書群の特質を踏まえた検討の方向性を協議することができた。  
また、料紙の地域的特性を検討するために、西ノ内紙の産地である常陸大宮市において楮畑を調査し、DNA分析のためのサンプルを採取するとともに、簀や摺鉢などかつて抄紙に用いられていた道具の現況調査をおこない、古文書料紙をとりまく多様な資料分析の可能性を検討した。  
　本共同研究で料紙の構成物に注目し、古文書を多角的に検討したことにより、文書料紙の時代的変遷や地域特性を中心とした情報抽出の可能性を提示することに繋がり、関連する科学研究費と連携して調査ハンドブックを作成するに至った。あわせて、調査データの利用・公開に向けた議論も進み、博物館展示の計画を含む成果発信も予定している。